

随
想
空
川
柳

い
乃
智

羽
原
静
歩



著者近影

序文

昭和五十七年に、静歩さんは古稀を自祝して、句集「足跡」を出版された。その句集の、あとがきにそえてという頁に、静歩夫人の香苗さんが、「毎日歩き続けて、来るべき喜寿には、第二の句集が出来ますよう、欲深い願いを立て、このことを祈念して、感謝の心としたいと思います」

ゆき暮れて ふと灯りあり 冬の窓

香苗

という、既にこの度の第二句集「いのち」を願望しておられる。

この度の第二句集の発刊は、静歩さんの経営しておられる、かおり幼稚園（御夫人は園長さん）の二十周年を自祝しての目出度い句集となったことは、洵に欣ばしいことで、心から御祝いを申上げる次第でございます。

この度の句集は、第一句集と違い、副題にあるように、静歩さんの随想が

句集のトップに載せて、友達の尊さ、友情の有難さをつくづく噛みしめていられる。

又子規と漱石の人間像を書いて、明治文学の楽しさにひたっておられる、静歩さんの誕生は、伊予の今治である。それで同県の出身である子規に心酔されるのはよくわかる。

素晴らしい高名の先輩が同県から出られたことは、静歩さんの文学熱をかきたてて今日をあらしめている。羨やましい限りである。

ここでも、子規と漱石の友情に大いにふれている。

随想三では、師、友の題のもとに、恩師を慕い、友達の懐旧のペンが躍動している。

そして随想四では、近頃思うことと題して、柳友の友情をしみじみと申述べておられる。友達を大切にする友情の篤い温かいお心をもっておられる立派な人格者である。

第一句集発刊以来、既に七年、静歩さんの川柳は、益々磨きがかかり、枯燥味が加わり、悟道味が増してきているのは、誰もが認めている。

今治懷古

ドラを聴く倭寇の海の夕風に

静歩

愈々淡々とした詠みぶりは一家を成している、傘寿、米寿と之から続く、長寿国日本の川柳旗手として、静歩さんの雅号の通り、静かに歩んで、傘寿の第三句集、米寿の第四句集の刊行されんことを祈ってペンを擱く。

昭和六十二年八月二十五日

水鶏庵にて

川柳塔社主幹 西尾 栞 識

序

羽原静歩さんが、このたび第二句集を出し、「いのち」と命名される。これは、この書が静歩さんの人生の記録であるというに外ならない。

静歩さんは、麻生路郎・葎乃両先生を知る今では数少ない川柳人の一人である。路郎先生は、数多の門下生に「いのちある句を創れ」を強調し、自ら範を示された。この「いのちある句」とは如何なる句をいうのか。後世にまで語り継がれるほどの佳吟のことか。私は否と言う。「人はそれぞれの人生の一瞬一瞬を充実させ、その一瞬一瞬に燃焼したいのちを川柳にうたえ」という意味だと受け取る。

いのちを充実させる精進が、路郎先生の「川柳は人間陶冶の詩である」という言葉にもつながるのではなからうか。

静歩さんは、昭和五十七年第一句集「足跡」を出版された。その巻頭には、吹けば飛ぶいのちの今日を長らえる

の一句が据えられている。ましてや昨秋には、生命にかかわるほどの病に呻吟されたのである。この句集の名が「いのち」でなければならぬ理由も、私には分かるような気がする。

さて、静歩さんの「いのち」の内容を垣間見ることにしよう。

先ず、幼稚園の理事長というご職業から、

入園式ママさんバレーの顔でなし

修羅の世もやっぱり揚げる鯉のぼり

お早うを何べん言います園長さん

また会う日まで忘れじのこどもたち

園長の香苗夫人を、

妻今日も不沈空母の化粧する

と頼もしく表現されるところは、かおり幼稚園創立二十周年記念の慶事に通じる。

静歩さん得意の旅の句では、

白川郷

落人がぬつと出そうな明善寺

中国

堯舜の昔を想う空の彩

スイス・チューリッヒ

切札というホテルのマツチかな

などとともに、故郷伊予を詠んだ次の句が感銘深い。

南無大師石手は春の香を焚き

伊予緋トントンカラリ春の音

最後に、いのちの項から私の好きな句を挙げると、

初春の鬮志を抱いて飾り凧

猫背よし対鳳庵の抹茶かな

雲水と舞妓チラリとすれ違い

新札のみな薄情に見えてくる

忙中閑閑中忙の昨日今日

ツアアウトさてこれからの人生か

洩瓶は洩瓶いのちの音を聞く

無一物無尽蔵落葉しきりなり

会者定離リングの皮を剥きながら

静歩さんが、これからも川柳を食べ、川柳を吐き、川柳三昧の生活を送られて、更に第三句集を編まれる日を待ちたい。その時の句集の名もまた、これからの静歩さんの川柳作品そのものである筈だから。

昭和六十二年八月

川柳塔社・副主幹 橘 高 薫 風

隨想と川柳いのち
目次

序文——西尾 栞

序文——橋高 薫風

隨 想……………1

初心忘るべからず……………3

子規と漱石の人間像……………6

師・友……………10

近頃思うこと……………15

苑の春秋	21
旅	45
ふるさと	75
女	83
いのち 第一部	107
いのち 第二部	197
跋 吐田 公一	
あとがき	
あとがきにそえて	

随
想

初心忘るべからず

読み初めの今年は川上三太郎

毎年のことではあるが、年の始めになると神妙な気持で、何か一冊川柳の原典となるべき書物、又はそれに類する書物を一冊か二冊選んで読むことにしている。これは日頃の續ん読に対する私のせめてもの罪の償いでもある。

今年、柳都川柳社発行 大野風太郎編の川上三太郎単語集「この道」を読むことにした。そのフロントページに

句の道は苦でまた愉し愛愛愛

句の道のはてのはてなる愛愛愛

句の道は実にしづかなり愛愛愛

三太郎

とあるのを見て、ずしんと心に響くものがあつた。「句即愛」の心境をズバ

り端的に表現された哲人の心境は、麻生路郎先生の「川柳は人間陶冶の詩である。」又梶元紋太先生の「川柳は人間である。」と全く揆を一つにするものであると思う。

さらに第七頁を見ると

先づ第一頁に

友

と書いた、それから

親

妻

子

とつづけ

最後は、また

友

で終る、わが

生涯の日は

かくありたい。

(昭和三十七年七月)

とあるが、さて私の場合はどうか。友・親妻・子のそれぞれに深い反省をすべきだと痛感している。昭和五十八年の大阪文化祭の秀句に、

友情をしみじみうどん吹きながら 中島夢成

癖のある字から友情こぼれ出し 選者吟 西田柳宏子

というのを見て人生行路難をしみじみと思うのは私一人ではないと思う。

子規と漱石の人間像

1 第一回目の来松

明治二十二年一月東京大学予備門で同級生であつた漱石と子規は、寄席通いを通して知りあい、生涯の親友となる。

明治二十五年大学生の漱石は子規の故郷松山を訪ずれ、子規の母が作った松山ずし（五目ずし）をおいしく食べたという。

2 第二回目の来松

明治二十八年四月漱石が松山中学校の英語の教師として赴任し、翌年三月熊本に転任するまでの一年間をここで過した。このときの漱石の下宿「愚陀仏庵」に子規が五十日余り同居し、一層の親交を深めた。

子規が漱石の下宿に同居したといへば聞えはよいが漱石と違い学業を中途で棄て、病いに倒れ、三十にならうとして妻をめとることも出来ず、家を興すどころか自分の代で正岡の系譜が絶たれてしまう悲哀と自責が子規

を襲った。そういう子規が身を寄せるところは、漱石の下宿以外になかったにちがいない。子規は階下に万年床を敷いて、病いを養いながら連日のように同好の青年を集めて運座（俳句の句会）をひらいた。二階に部屋を移した漱石は、うるさくて本を読むこともできない。漱石の記に「僕は二階に居る、其のうち松山中の俳句を作る門下生が集まって来る。僕が学校から帰って見ると毎日のように多勢来ている。僕は本を読む事もどうする事も出来ん……止む得ず俳句を作った。」云々とある。初めのうちはうるさくて勉強もできやしないと、こぼしていた漱石もついにその仲間の一人となった。この時子規に俳句を学んだことは期せずして、彼のなかくすぶっていた表現したい本能をあおりかきたて、将来創作への芽生えに役立つことになった。又一方子規は毎日のように蒲焼を食べて、その払いを漱石に廻して、そのうえ金まで借りてさっさと東京へ帰って行ったのも事実らしい。月給日のある時、小遣いをやろうかと言って漱石が子規の寢床の下に幾枚かの紙幣を敷き込んだという情景を、漱石の俳友柳原極堂が語っているが、正に友情を通り越して、まるで恋人の身を気遣うような漱

石の愛情が切々と感じられる。

次に明治二十二年十月漱石の「木屑録」に跋を寄せた子規は、その続きに「余は始めて一益友を得たり、吾兄の如きは千万人に一人のみ」と記し、又同年の「筆まかせ」では漱石は益友から畏友にかわっている。つまり英語や漢詩文の能力だけでなく漱石の人間的な魅力に引きつけられた子規が漱石を畏友として信頼するようになった心境がよくわかる。漱石は明治三十年には俳人漱石として著名になったし、離松十年後には名作「坊ちゃん」を「ホトトギス」に公表した。もともと、その頃の漱石の句に対して子規は、これでは句にならぬと散々な批評したこともあったが、ともかく漱石の発想や表現の上に大いに資するところがあったのも事実である。漱石の女婿松岡譲は「子規の産婆術よろしきを得て、漱石は文豪になった。」と言われたが誠に感銘深い言葉だと思う。この意味において漱石と子規が同居した短い五十余日の愚陀仏庵の生活は、実に近代日本文学の発祥の場であり、昭和五十六年松山市立子規記念博物館が、道後公園の北に開館、人間子規が驚異の眼を以て、その声価が次第に見直されていることも又歴然

たる事実である。

なお明治三十年夏休みに漱石は熊本から上京、子規庵で四回も句会を催したし、漱石外遊中はロンドン消息を子規は心から喜んだという。

同三十四年十一月六日漱石あての最後の手紙は、涙ぐましいなかにもユーモアがあり、子規にとって漱石は、心をうちわって訴えられる唯一の友人でもあった。

明治三十五年九月漱石がロンドン留学中に子規の訃を聞き、高浜虚子あての手紙に

「筒袖や秋の枢にしたがはず」

「手向くべき線香もなくて墓の秋」

と弔句を送っているが、子規を思う切々の情がよく表われていると思う。

奥道後坊ちゃん団子食べながら

師・友

佐伯千尋校長

師範学校の校長として典型的な人物、まるで全身之教育勅語のシルエツトという印象を持つ、かつて学校の講堂に秋山好古陸軍大將を私達に紹介された当時の印象が特に強い。

藤井周一先生

通称「豆さん」「山椒は小粒でもピリリとからい」の諺にピタリの好人物であった。学究肌の先生で孔子の研究では夙に有名、ともかくも沢山の悪たれ小僧や風来坊の世話には随分苦勞されたと思う。先年、同窓会の席上お達者な様子を拝見したものの、つい昨日のように思われる。

石川哲三郎先生

今治市在住、先生の英語の時間にナショナルリーダーの暗誦をよくした。
中村先生とともに楽しい英語の時間であった。

山本皓堂先生

手工室の「ヤンサン」で親しまれていた。東京芸大の出身、敬慕と親近感の強い先生だった。木工、金工、観音様の修理など何でもござれの名人気質の先生であった。

青木明先生

書道の号は湖石、師範学校の一年の時、「君の習字は素質がある。練習次第だよ。」とほめられたが、その後一向に練習せず。川柳をやり始めてから二十五年、昔の罪亡ぼしに短冊等をよく書くことがある、そんな時、先生の顔を思い出す。「君、今からでも遅くはないよ。」とあの世から声をかけられているようにも思われる。五十九年四月、京都の東山閣で同窓会

を開いたが、幹事の柿下盛寿君と二人で、お宅を訪問し先生の御霊前に拙著「足跡」をお供えたこと等、まだ記憶に新しい。

佐々木経夫君

坊ちゃん気質というのか風来坊というのか妙に気があった。午後の授業をさぼって、ちょいちょい映画鑑賞に行った記憶がある。ラグビー部の練習には有田君も佐々木君も私も楽しい汗を流した思い出がある。愛媛県から出向の辞令を頂き大阪市内の小学校へ赴任した時が彼にとって幸福の絶頂であったのかも知れない。四余畷の拙宅へも度々来訪し、平和な楽しい一時を送った思い出がある。若くして永眠したのは、如何にも惜しい。

大城隆（高志）君

在学中より気さくな好人物。書道に熱心で後に故青山湖石先生に師事し仮名の書道に精進している。数ある同窓生の中で先の大戦に私も彼も狩り出され苦勞した経験あり、そのためか妙にうまがあう。

渡辺雄登三君

典型的な紳士、昭八会の幹事として、その近況報告もありがたく思う。同窓会に限らず、凡そ会と名のつくものには必ず蔭の強力な推進力が絶対に必要であり、正に適役であると思う。

沖野 武君

株式会社「オキノ」の社長として、その敏腕ぶりは定評のあるところ。とても私などの出る幕ではない。一定宇和町に行つて、その精進ぶりを拝見したい。

原田改三君

北条市長四選、正に闘志満々の政治家。

昭八会から君のような人物が出たことはそれ自体、大変おめでたいことであり我々にも一服の清涼剤を呑んだような気がする。健康で今後の活躍

を切に祈る。

石井南放君

元愛媛大学教授、元東雲短大教授、原愛媛大学教育学部同窓会長として活躍、その鋭い観察眼と雄渾な筆さばきによって表現される一木一草の姿は夙に定評あり先年、松山で個展があり私も鑑賞に行ったが「中国の風物」「愛媛の松」等、そのどれもがとても印象が深い。

「桂林夢幻」の墨絵は私のマンションの玄関に掲げてある。私は、その印象を拙著「足跡」の中で

「何度見ても桂林夢幻の墨絵かな」と述べ、更に今回の句集「いのち」の中にも「桂林の墨絵ほのぼのマンションに」と述べた。ともかくも、これからも何かを描き何かをする男である。

備考

この項目は、昭八会の懐しい顔ぶれのほんの一部であり、まだまだ書きた人もあったが、紙面の都合で省略したことをふかくお詫びしたい。

近頃思うこと

私が近頃しみじみと感じていることを少しばかりお話したいと思います。私は去る五十七年十二月古稀を記念して、これまで私の体験した数々の出会いと別れの思い出をまとめて句集「足跡」を刊行した訳であります。「足跡」刊行については、各方面から数々のお祝いと激励を賜わり、文字通り身にあまる光栄と思っております。

さて、その中で、とりわけ私の心をゆすぶったお手紙に次のようなものがあります。

それは川柳「しんぐう吟社」の大矢十郎先生のお手紙であります。御承知のように先生は昭和五十六年十月、路郎賞を戴いた立派な方であります。

即ち

「順々に嫁くそれだけを羨まれ」の句、誠に先生のほのほのとしたお人柄をあますところなく表現された句であります。その先生から次のようなお

手紙を頂いたのであります。以下、お手紙の原文を紹介させていただきます。

この度は句集（足跡）をご恵送賜り誠にありがたく御礼申しあげます。早速お礼状を差し上げる心算が娘の結婚式其の他多忙が重なり本当に失礼の段平にご容赦賜わり度お詫び申し上げます。句集を拝見致しまして先生も天理教を信仰されている事を御同慶に存じます。私の父母も六十五年添うた時から天理教信者でした。六十五年間添うた夫婦も珍しい事と思います。十人目の十郎にとつても最もほこりの一つとしております。私も門前の小僧ですが尊敬する人は天理教祖様です。

（天理教の数祖は中山ミキ）

「気がつけば父の足跡踏んでいた」 静歩

此の句を読んだ時、亡父母に対して申し訳なく思いました。

ありがとうございます。ゆっくりと読ませて戴きます。「みかん」同封しました。ご笑覧下さい。

大矢先生のような御立派な方が親ゆずりの天理教の信者であること等全く知らなかったので、私は早速柳誌「川柳塔」の昭和五十六年十月号を出し

て見ました。先生の柳歴を御紹介しますと

昭和四十四年川柳瓦版一行を迎えて浅利太平、小山峻氏らと共に「新宮時事川柳会」を結成、傍ら葵水先生のご紹介で近作柳楯へ投句、白柳、葵水両先生より通信指導を受ける。四十七年一月川柳しんぐう吟今社創立みかん。五十年一月川柳塔社第一回各地壇賞受賞。五十三年川柳塔社理事から参事拝命。一男五女。

とありました。特に私は最後の「一男五女」の四つの文字に心打たれたのであります。六人のお子様を営々として育てられ、その内五人の娘さんを夫々他家に嫁入りさせられている。この平凡にして、しかも偉大なる事実の中から、路郎賞の句

「順々に嫁くそれだけを羨まれ」が生まれたのは全く敬服の他はございません。このお手紙を通して、私を感じましたことは、先生が常に「信仰」という心の灯を燃やされ、その信念の上に立たれて数々の素晴らしい川柳をお作りになられている。この事実は只々羨しい限りと思えます。

次に同封の第一三三号の中に、先生の四女裕子さんの御結婚に当たり川柳

塔の同人の方々かせ数々の祝吟がのせられています、その中に黒川紫香先生の

「慶びは父の瞳に娘の晴れ着」

野村太茂津先生の

「慶びのときめき聞く秋の矢」

若柳潮花先生の

「仕合せは貴男と言える人が居る」

更に又、十郎先生は最後に父親としての喜びを

「和を保つ夫婦に長い坂がある」

とその心境を述べられています。私も二男一女の父親として長女「良美」を昭和五十一年の一月に嫁がせた経験がございます。その時私は「結ばれて白梅の坂登りけり」という祝吟を述べまして、これを句集、「足跡」の中に入れたのであります。

さらに川柳十月号に先年亡くなられた若本多久志先生が、「すばらしき哉人生の秋」と題された随想の終りに、「幾山越えてわが道悔いもなし」と又、

同人近詠の末尾に去る四十七年、日米川柳大会で二週間私と起居を共にした故浜田久米雄先生が、「喜寿の日が迫り死などは恐れない」と述べられ、さらに先年路郎賞を受賞された句に「握手した掌が離れないまま坐わり」というのを思い出し、最後に橋高薫風先生の「母病む紅白分つ花多し」という句を拝見しまして、一層威銘を深めたのでございます。ともかくも「川柳」という御縁のありがたさをしみじみとかみしめている今日この頃でございます。

苑の春秋

どの彩に染めよう朝のこどもたち

春

雛壇のひとつひとつにわらべ歌

祝かおり幼稚園第十九回卒園親も子も背伸びしている揚げ雲雀

通園バス春のおぼろを縫うて来る

入園式ママさんバレーの顔でなし

修羅の世もやっぱり揚げる鯉のぼり

S組の笑いチツチャな外交官
マーガレットさんへ

母と子のフォークダンスは漣に
母の日

ガリバーもトンガリ帽子も砂場の瞳

春風にバングラデイシユの子も笑い

二十周年記念運動会

プログラム春のビデオが忙しい

両脚跳び春のムードを狭み撃ち

カラフルな春の帽子は漣に

メルヘンの超特級に春の風

一着二着ああ神様の瞳が笑い

保母さんの伴走テープの下を抜け

モノレール京都タワーも顔を見せ

親と子の達磨神興の肌が合い

来賓のチーム五月のカルテット

笹曳きのボールどうでも転びそう

親子体操キリンサンになりきって

宝さがし内弁慶の瞳が笑い

風船の開いて閉じて親子の瞳

春風に卒園生のまつしぐら

締め括る「おわりのことば」清々し

かたずけて帰る夕日が美しい

祝祝かおり幼稚園二十周年記念 二二句
六百の風船五月の空を飛ぶ

五ヶ荘につなぐ縁のあれやこれ

夏

颯爽と来て保父さんの朝の顔

保母さんとひと味違う保父の味

保父さんのマンツーマンを保母が見る

クレパス父の日 三句のパパそれぞれに苦笑い

父と子の虹の架け橋小半日

父の日の代理の母はそわそわし

八月よジャングルジムがとろけそう

ペンキ塗る浮世の汗を拭きながら

風鈴の鳴るともなしに昼さがり

三味線も琴もひっそり園長舎

この苑御幸幼稚園に夫唱婦随のいのちかな
二句

水しぶきあげて御幸のこどもたち

秋

お早ようを何べん言います園長さん

靴入れにひっそり秋が沁りこみ

朝礼の百面相へハツパかけ

敬老の日 二句
敬老のまだまだ若い瞳が並び

風雪の顔のんびりとグリーンティ

秋風にピタリ園児の募集ビラ

カルチャーのママそろそろと参観日

給食のパンモグモグと驢馬に似る

園庭に誰が捨てたか曼珠沙華

知恵の輪をスルスル潜る七五三

宇治神社

歯を磨く百面相の顔がよし

製作展 二句

どの部屋もやんわり二十一世紀

冬

生活発表会

アプリケの幕がするするユートピア

しきたりのように師走の餅をつき

もぐもぐと黄粉まみれの冬の顔

節分の鬼が逃げ出す窓を開け

園長もこどもに還る誕生日

鈴なりのいのちを乗せてバスが着き

また会う日まで忘れじのこどもたち

旅

旅衣句帖に旅の夢を盛る

I

百年の時の流れを妻籠宿

木曾路

六句

鈍彫りの円空仏に惚れなおし

道祖神木曾路の春のシルエット

演歌よし「木曾路の女」歌いきり

無心にて候寿命そば五平餅

朝焼けの御岳さんに神が澄み

土瓶敷飛弾路の心買い漁り

白川郷

三句

落人がぬつと出そうな明善寺

合掌の宿鈴なりの湯につかり

哀愁の高山飛弾高山 三句財布が落ちつかず

風来坊骨董品を買わされる

お神輿よ天上天下の春の顔

市丸天龍川の小唄も乗せて川下り

水千曲川浅く流れて千曲の早春賦

ものふの亡びるものは美しき

小諸城趾

遠島や流人の涙溢れたり

佐渡 二句

おもろうてやがて哀しい佐渡おけさ

鳥取砂丘
風紋の砂丘あくまで風の詩

長崎 二句
陽はおぼろ街もおぼろにザボン売り

潮騒もここは平戸の溜息か

II

スイス

ぼたん雪ガイドの名刺はブラックに

チューリッヒ賛歌

六句

ペンケース忘れた古城の昼さがり

切札というホテルのマッチかな

訝してホルンはスイスの彩にとけ

チユーリッヒの夜は涅槃の匂いする

思維すれど思慕すれどチユーリッヒの夜

中国

身動きもせず上海に魯迅の旧居かな

北京北京 三句の広さ四国の広さとは

人間が小粒に見える天安門

鴻帆楼お上りさんの溜り場で

長城のトイレ女は見ないふり

万里の長城 二句

堯舜の昔を想う空の彩

中国の記念切手へ思案する

孫文の寝顔南京中山陵中国の寝顔かも

長江大橋

長江の水の流れを飽かず見る

南京師範学校付属小学校 二句

黒板の熱烈歓迎恐れいり

この国もやっぱりあつた落ちこぼれ

人民公社ひっそりかんと古めいて

吹く風も流れる風も寒山寺

蘇州 三句

中国の愁い胡弓のすすり泣き

蘇州よし歴史の重み支えたり

二年ぶり鐘先生に御挨拶

鐘啓泉先生は中国の文化人として夙に有名

ウロチヨロと廁を探がすエトランゼ

上海杭州間の車中風景

懸想したよう江南の春を縫う

中国の心ほのぼのジャスミン茶

水墨画のんびりやんわり売りに来る

春の夜の人民公社の灯を思い

春宵一刻浮世はなれの顔が寄り

杭州ホテル

四句

旅人の心がなごむ水墨画

剪紙の鑑真和上浮き彫りに

杭州の朝風呂昔の二等兵

玄関の熱烈歡迎でれている

杭州市安吉路小学校 二句

日本とはひと味違う筆の冴え

晴れ姿瞳の奥のわらべ歌

同付属幼稚園

三句

ママゴトも新中国のお国ぶり

輪になつて踊ろう世界は一つなり

漣や西湖西湖 二句に春を浮かべたり

春風に蘇堤・白堤・湖心堤

タイ国

バンコクのロビーの朝の涅槃像

エメラルド寺院
仏舍利塔天に連なる宿命か

汗みどろブーゲンビリアのお出迎え

ローズガーデン

二句

人間も象も汗かくコメディアン

肺然とスコールお昼のうまいこと

コーラン島

二句

微粒子の心サクサク砂を踏む

エリートラッサミ幼稚園の苑につこりサインする

この苑ベンチャマ幼稚園のぶち抜き天井バンクめき

洗濯の前をザンブとダイビング

メナム河風景

三句

この家の暮らし水瓶二つ三つ

タイ国の商魂水上マーケット

タイ国の料理どこまで油ぎる

暁の寺暁の寺 二句
切切と天に延び

仏像にチラリ浄土を匂わせる

バンコクの別れを惜しむ朝の顔

一枚のコインバンコク空藩 二句に思い出あたためる

又会う日まで空港のあわただし

旅衣木曾路まつやまちユールリッヒ

ふるさと

ドラを聴く倭冠の海の夕風に

今治懐古

今治城藤堂さんの出世餅

煩惱のタオルそれぞれカラフルに

名物の鶏卵饅頭舌にとけ

松山有情

君を訪う道後湯の町みどり台

南放さんへ

ふるさとにチンチン電車若返り

松山の南魂テレフォンカードにも

押しボタン名所旧蹟鮮やかに

松山市立子規記念博物館 三句

落花落日子規山脈の風の音

俳聖も歌聖も泣けよあずま菊

南無大師石手石手寺 二句は春の香を焚き

みだれ髪石手の秋へ掌をあわせ与謝野晶子歌碑

松山城
慶長の昔を想う花曇り

道後温泉
坊ちやんも子規もいそ
うな湯気の中

昭八合 二句
集い来て生きとし生ける春の顔

盃の底に昔の顔がある

創始者鍵谷カナを想う

伊予絣トントンカラリ春の音

哀しみは伊予路の春の媛だるま

寂しければマドナの鈴を振る

女

五線紙へ綴る女の冬の旅

琴の音は初春の調べか潮騒か

福娘初春の喜びこぼれそう

愛染さんサンバ宝恵駕籠アラカルト

大阪暮色おんなは情けにもろくなる

みだれ髪八瀬には八瀬の片しぐれ

シャンソンに風あり菩提樹がゆれ

乗馬クラブ只今花嫁特訓中

インタビュ―木暮実千代の横顔に

ラフカデイオハーンの中の雪女

三井裕子さんへ

親と子の縁を結ぶ冬の天

脐繰りも積りつもってバラ色に

すきやねん大阪おもしろく住みよくて

浪花節おんなはコトリと騙される

滯つくし浪花女に意地があり

美容院核戦争の話など

「抜かぬが花」小次郎ガサが濶歩する

男アクセク女は株で儲けます

コーラスの女樹海の漣に

口紅挽歌ふるい女と言われても

蝶々のつづれ話はラムネ色

天翔ける川喜多かしこの昨日今日

先方が美人でこちらがツンとする

胎教の女は過去をふり向かず

舞扇おんなサタンに見えてくる

ヒット曲時の流れに忘れられ

ピアノ弾く積乱雲が透いて見え

寂聴も聖子も同じクリスタル

昭和元祿エアロビクスの艶姿

吊り革にお琴三味線裏千家

人間に生まれ晶子忌曼陀羅の恋もする

針供養女の業のひとつずつ

ダムになる過疎を女は撮り続け

風に乗る智恵子智恵子抄は五月の幻か

テラーの哀愁夜霧の中に消え

モロッコのデイトリッヒも幻に

黒髪のみだれにポプラに秋の風

おしゃれして少しは本も読みたまえ

堂々の貫録サッチャーに似ています

業なるか井上八千代今日も舞う

J R 昨日の恋の走り書き

小便小僧恋の清算チラリ見る

岡田嘉子ソ連に健在
国境を越えておんなの幾春秋

うらぶれた恋へ案山子の無表情

月皓々わかれことばを考える

花時計北の蛍はふり向かぬ

舞い姫のどこか似ている血の絆

窓開けて桃井かおりの失語症

映画「幸せの黄色いハンカチ」より

「源氏」説く村山リウの朝の顔

下町の太陽倍賞千恵子シヨ一

合ねむ歡むの木に宮城まり子の瞳が笑い

哀しみのここに窮まる墓の彩
田中絹代を偲ぶ

神様もうつとり見てる水着シヨ

百度石女の業が滲み通り

神楽舞う巫女におんなは消えていた

バレリーナ秋のふかさへ落ちてゆく

葱きざむコツコツきざむ冬の音

モナリザの笑いに冬が澄むばかり

マドンナへ難波球場首ったけ

静や静シンクロナイズの水の彩

大型新人類歌人誕生

俵万智よくぞ昭和を歌いける

平田翠先生へ
保育とは別に句評も鮮やかに

妻今日も不沈空母の化粧する

元日の妻に詫びること多し

戒名で呼ぶと亡母が他人めき

亡母を憶う 三句

矮鷄ちやぼのよう鳳仙花のようわが亡母は

流し雛亡母流して満ち足りる

飯盛靈園
浄土にも届けこの世は雪しきり

いのち 第一部

産声にいのちの的は射られたり

聖寿萬歳日本人の血が流れ

嬰鏢と張りきりほんのり呆けている

川柳塔社新年の集い
生きのびて尾上の松はみどりなり

睨み鯛にらんだだけの三ヶ日

初春の闘志を抱いて飾り凧

一月のポケットマネーが底をつき

正眼に構えています箸枕

露天風呂ギックリ腰は忘れたり

千羽鶴ゆれる挽歌の窓を拭く

浄土でもやっぱり君は鉢巻きし

佐々木経夫兄を憶う

同窓はよし河久の酒を酌み

アルバムの昔よく食べよくサボリ

春愁の土筆ほろ苦くほろ苦く

ハローページタウンページと忙しい

盃の底に切り札溜めている

マドンナとカルガモさんの春の顔

絵日記の中の爺ちゃん颯爽と

ぐいのみの男の眉の幾春秋

大塚千葉先生に贈る

上げ底へ仇のように包装紙

人間を裁く人間の咳ばらい

不死鳥の天に連なる祈りかな

カゴメカゴメ春の笑いの土を踏む

本心を明かすと肩が落ちてくる

遍路笠一期一会の空を見る

胴上げにされて大安のピエロなり

料理天国屋台の味が滲み出る

よういどんシーソーゲームの善と悪

増税へ民はごまめの歯軋りで

電話口鬼籍の人をふと思う

如月の雲を見ている寒椿

尾上金吉氏を憶う

草むしる二軍のことをふと思う

その若さ零対零が投げている

ツアーアウトさてこれからの人生か

割り勘で吞んで政治がなつとらん

おりひめの鶴屋の菓子を褒めちぎり

炭鉦が消えるニホンが寒くなる

紅白の餅を配って気が疲れ

黒田節八方美人の喉が冴え

仏にはすまんが戒名読み違え

眼薬をさして無欲の顔になる

石仏に心ほのぼの苔の花

新聞の世相が寒い花曇り

煩惱と煩惱楽しいデートする

心配りのあれもこれもと苦労性

ゴキブリよ永住権が欲しいのか

河川敷のこどもと話す五月病

螺旋階段風も螺旋に吹いてくる

送られて送ってへいへいブギの顔

大阪空港

水割りの約手しきりに咳をする

老いらくの恋も墨絵の菖蒲園

菖蒲園苦海浄土の夢を見る

過去帳の仏と話す春の宵

三千院春の愁いを捨てて来る

ぐい呑みで呑むと浮世がまるく見え

甘酒がうまいと思う裏話

カーキ色にしたくはないぞ地球儀よ

澁瓶しゅびんは澁瓶しゅびんいのちの音がする

来ることは来たが買わない植木市

ジャスミンの花から童話落ちて来る

生きざまを問えば神様笑いだし

猫背よし対鳳庵の抹茶かな

昭八会（京都東山閣）二句
人の名もおぼろに霞む五十年

腰据えて言い出し兵衛の残り酒

犇めいて都会の隅の吹きだまり

大方は買わない人の個展の灯

デパートの玩具売場は素通りに

セーターを一枚脱いで納経帳

人間の心を探る百度石

雲水と舞妓チラリとすれ違い

ループタイ五月の風は漣に

その人の年齢は問うまいループタイ

風鈴に親子の絆生きている

八重桜すこしモラルがたりませぬ

靖国神社春の大祭

閣僚がウヨウヨ神様眼をさまし

荒神山吟行

旅人の舌に地酒も紫蘇飯も

金平糖昔話がたつぷりと

税務署へ柳誌一冊持って来る

三重苦へレンケラーよサリバンよ

広辞宛ことばの海の旅をする

神様が占う細木数子の顔

玄関のコケシ花巻音治型

利子記入利子は雀の涙ほど

地這りのように自動払いされ

大臣の素顔兵児帯締めてから

電話帳浮世の義理が詰めてある

水無月の浄土の風に声もなし

義弟の急逝を悼む

弔電をうつてしみじみ老いを知る

コースター時に止って拗ねてみる

五里霧中わたしの夢のマイホーム

表札に人間曼陀羅生きている

週刊紙めでたく結ばれ破れたり

王様も乞食もお祭り好きらしい

摂政を置きたいような世の流れ

キツチリと兎小屋にも市民税

生きる日のけじめをつけて髭を剃る

ハイビスカス午前三時は眠たかろ

焼き茄子に鄙の悟りの味がする

地下街で三千世界の鬼と逢う

競り市の魚のいのちをいとおしむ

「お見舞」と書く仏滅の白い雲

勲章のようにベタベタサロンパス

休みたい時もあるうに出勤簿

相槌をたっぷり打ってスパイする

キツチリと約束キツチリ忘れてる

王将を泣かせてみたい歩の心

住みよいかハワイの土地を買いあさり

大詰めというドラマのあっけなし

鳳凰は火の鳥浄土はむらさきに

宇治平等院

慶弔費昔はこんな金でした

ニッポンに南州翁はおらんかね

ステテコの煩惱バツサリ袈裟斬りに

人間も車も若いハイウェイ

忙中閑閑中忙の昨日今日

七曲がりユダの眠りに近くなる

パレードよ浪速の秋のシルエット

石段のひとつひとつにある祈り

西国三十一番長命寺

ほのぼのと笈おいずる摺堂に思うもの

三十三番満願霊場華嚴寺

コマーシャル高倉健のさりげなし

ますらおの赤いハッピーよカモメール

お薬のプラスマイナス恐ろしや

綿棒に縁なし今日も地獄耳

溝掃除年寄り組へ入れられる

一枚の葉歴史を積み重ね

腰据えてシルバーシート知らん顔

アフリカの飢えと日本の披露宴

煩惱の誤植ばかりを老いの坂

靴ベラに朝の心を覗かれる

桜餅老いの闘志を丸く食べ

閻魔様にも奥様はあるらしい

大正の文鎮どっしり腰を据え

骨董の艶は明治か大正か

ポンコツの手に節くれた千羽鶴

ダスキンで神々しくも磨かれる

赤旗を振って物価が又上り

何よりの友情貸さないことにする

コン畜生と思うとたんに負けていた

ともかくも禁煙タイムの朝の駅

嫌煙権たばこ屋さんがつぶれそう

サンガラスどうにもならぬ朝が出る

それなりの恩を知ってる木偶の坊

宮参りこの子をいくさにやるものか

仁王様サロンパスなど如何です

先方も私も名刺きれたまま

山添先生の叙勲を祝う
ひとすじの道ほのぼのと叙勲の日

銀行で借って猫背がホットする

倒産の気配も見せずゼミナール

ある時のアタッシェケースに黒い霧

ジャスミンの花ほのぼのと原稿紙

相聞歌うたい継がれて幾春秋

平和とほいいなパチンコ文化賞

早退の鞆に数珠と香典と

喪の家の連翹今をさかりなり

法螺貝の視野に悟りが満ちてくる

これやこの泣くも笑うも円高に

焼香の順さりげなくさりげなく

一票が欲しい花輪の無然たり

岩おこしモグモグ食べて父の味
亡父を憶う 三句

愛蔵の軸を抱えて四坂島

子に旅を教え真つ先黄泉の旅

無理するなと無理なことを言う

鶯の声もチラホラ峠茶屋

宇治田原

分校の雲とお話したくなる

倅せの浄土に飛ばぬ青い鳥

筆不精長距離電話に隙がなし

握手して絆いよいよ遠くなる

世話焼きがいるから浮世ややししい

花道を飾る花束むらさきに

萬葉の心も知らず石舞台

お献立糖尿病と胃潰瘍

北の島還らぬ島をふと思う

情けある寸志ちいさく達筆で

全国高校野球に天理高校優勝
優勝へ一手一つの汗光る

徳之島重千代さんの顔の皺

秒針のドラマ見ている花時計

青春のサッカー青春まっしぐら

すがすがしメタコセイアの衣替え

大正の月下氷人汗をかき

スーパーの一円硬貨堆し

白手袋公約なんかしなさんな

選挙演舌大阪弁でしてみたら

コスモスが咲いたよ
値上げの秋がくる

猫の手も借りたい
猫が見つからず

その立場変えると
虹が見えてくる

年度末又掘り返し掘り返し

この頃の大卒わびしい咳をする

山下選手国民栄与賞受賞

汗しとど汗もキララに柔道着

善人の嘘はハッキリ透いて見え

麦秋のゴッホを思う空の蒼

蝸の夢にゴッホが落ちてくる

お隣りのフォークに合わすフルコース

秒針が止ったままの初版本

活字よりカセットテープに流される

坊さんもミニスカートも定期券

「オハジキ」と「ハジキ」の違いを考える

時雨する陸橋蟹が売れ残り

煩惱の夢いっぱいにお賽銭

西国のバスにもカラオケ鳴り響き

箸立に生きる希望が入れてある

洗濯鉢み浮世の苦勞しりつくし

相聞と挽歌仲よくラブコール

アルバムの空白歴史が埋めてある

東京沙漠お里沢市幻に

土下座してこの一票の哀れなり

ネクタイの直ッ正面のライバルぞ

小倉パン蒸しパン大正の舌にとけ

七、八月の煩惱よ九月の蒸発よ

J R 九月の風がほろ苦い

十一階ウルトラCの雀来る

重文へ白蟻さんの労働歌

再審は門前払いのピリオッド

縄のれん巨人阪神荒れている

遮断機を越すと煩惱消えていた

ケシゴムで昔むかしが消えるなら

人間の定義生きてはる食べてはる

紅白の演歌それぞれ性をもち

落日の城に情けが埋めてある

動物園キリンの首と立ち話

過疎もよしすすけて雅みやびで寝ころんで

ベトナムの悲劇いつまで繰り返す

ドレミファのように並んだ寒雀

淡雪に似て年金の昨日今日

巨星墜つ浄土に続く白い雲

中島生々庵先生を悼む

継ぎはぎの童話でこどもが眠れない

鍵っ子の鍵は確かな主張持ち

赤福の餅を絆として食べる

網棚に位牌も遺骨も質草も

女かと思れば男のみだれ髪

議員パスよくぞニホンに生まれける

拝観料たんとたんとお取りやす

古都税の一皮剥けば僧兵に

見渡せばエゴもエッチも飯を食べ

大阪芸術大学

大学のクラブに忍者犇めいて

風来坊白内障の視力表

吉田翁樹先生の「温故知新」発刊を祝う

フィリッピンの思い出切々胸をうち

自問自答貧乏くじを引いて来る

浮き草の浮くも沈むも風の中

笹竹にあなたの明日が見えますか

歳時記を知らぬ野菜を今日も食べ

胃カメラの台風圏に近い顔

四捨五入しても情けは割りきれず

搗きたてのお餅がうまい空つ風

勘亭流冬の心をあたたためる

風車回るああラッキーは何処をさす

金貨には縁なし朝の定期券

ポンコツのペダルしきりに歌が出る

旅に来てマージャンだけは止め給え

ゴムバンド所帯の隅を覗かせる

土手焼とフランスパンの人生譜

湯豆腐の湯気に人間とりもどし

箸袋粹な演歌が書いてある

もっともつと握手しなはれ社公民

十二月関白宣言影もなし

追い剥ぎのように賀状のボールペン

減税と増税二つのクリスマス

鮭の切り身のいよいよ薄う年昏れる

民宿とペンション味を競いあい

お賓頭びんずる廬呪文のように撫でまわし

ビッコ引く鳩もやつぱり鳩ポッポ

万歩計いのちの朝をテクテクと

アンメルツタテヨコタテヨコ忙しい

核の冬地球が寒くて眠れない

脇役にカーテンコールはないけれど

いのち

第二部

風花にわが青春の走馬燈

かけている眼鏡をさがす鼻の汗

人間が作るドラマの浮き沈み

底抜けの笑いに明日の夢があり

ああニッポン石部金吉マネービル

土地ブーム福沢さんも眼をまわし

新札のみな薄情に見えてくる

茶碗蒸し茶碗の底の人間味

のど仏言いたいことがまだ言えぬ

それなりの夫婦に昭和枯れ芒

司会者も数々あれど三枝かな

会いに行く旅はやっぱり船がよし

会者定離リングの皮を剥きながら

守口市駅風景 二句
これはこれは駅前広場の変わりよう

時告げるカリヨンの鐘すがすがし

ランドリーいのちの洗濯まではせず

昔むかし千人針の祈りかな

クーニャンと昔搾ったミルクです

煩惱の昨日今日明日火の車

ポチポチと売れます男の化粧品

金バッジ逃げの一手はもう古い

列島の渚の線が痩せてくる

置き薬時々問審したくなる

オルゴールスイスの音を確かめる

嘘のない鏡で明日は霧の中

平均寿命百五十五歳の泣き笑い

中村医院 三句

戦犯のようにカルテに書かれたり

ホームステイの女颯爽と現れる

その若さ零対零が投げている

心ところてん太イトコハトコを突き出しに

水飢饉水の御恩が今わかり

美術展芳名録の筆の跡

披露宴裏方さんは玉の汗

古本屋明治の顔で出して来る

日日好日只今生活笑百科

昭和元祿コアラもパンダもスターなり

古切手ちいさい祈りの幾山河

朝風呂の庄助さんで皆勤し

一線を越すと倫理は消えていた

語り部に歴史の下駄がちびてくる

水子不動孤独地蔵とさしむかい

轟々といのちを綴る輪転機

家系図の中のあの顔あの瞳

猿山の猿知恵今日も生きている

キリシマが咲いたよ愚痴は止め給え

インヴァネスそんな言葉も古めいて

後足で砂をかけてる御挨拶

商売のコツも覚えて倒産し

目撃者いえいえわたしは傍観者

綿菓子わたあめの袋にメルヘン詰めてある

人間の作るコピーでややこしい

水割りの底で一揆いつげんを考える

眞実は一つもつれるのが不思議

集金の足コツコツと遍路めき

香なりとせめて焚きたい四面楚歌

野仏を数えて通るハイキング

盃の視野に男の坂がある

不死鳥の瞳
浄土へ羽搏いて

長兄を悼む

八月の雲に祈りが届かない

ヒロシマよナガサキよ雲の縄電車

夾竹桃涅槃の風を聴いている

橘高薫風先生の「愛染」発刊を祝う

湖の琴のしらべかページ繰る

七草をバイクにつけて淀の秋

無一物無尽蔵落葉しきりなり

極楽も泣きます
霊園汚職です

花活けて秋の仏に語りかけ

香川県慈雲寺

記念誌のタイムカプセル鮮やかに

四條畷小学校百周年を祝う

新婚もスリも喪服も新幹線

食堂車カレーライスが滑るよう

そのうちにニッポン中が新幹線

マンションにスーポのさめぬ縁えにしです

心意気年中損なことばかり

犇めいて枘目を埋める人生か

コンテスト外人さんの日本語

青竹を踏んで孤高に耐えんとす

神様もうつとりいのちの演歌です

奈良はよし鑑真和上の瞳が笑い

唐招提寺

お仏壇おやおやこれも輸入品

赤本のページをめくる午前二時

幻に三八銃が追いかける

神様も体外受精に気が疲れ

人間が作る人間のシルエット

ボーナスの裏でローンが待ちかまえ

御祈祷の護摩木を送る宅急便

ニッポンに生まれニッポンの心枯れ

朗々と校歌流れて河川敷

五十ごとばら払いすつきり挨拶してくれず

平凡なスランプ一杯呑めばよし

二次会の夢を見ている終電車

些小ですがと些小でない瞳

五風十雨朝のコーヒー呑みながら

無重力の恋を見ている月の石

絵馬堂の絵馬が骨董めいてくる

すれすれの汚職でボスで生きてます

猿芝居勸進元はどなたです

島四国祈りはひとつ鈴を振り

人間味たっぷり
のんびり欠伸する

貸す方が馬鹿を見ている昼の月

ちやかかぶき

宇治風景

茶香服の舌すんなりと選り分ける

茶香服とはお茶の品評会のこと

平野氏の令息の結婚を祝う

水無月の二人三脚爽やかに

台本のないドラマが開くターミナル

人間の絆忘れたロボットよ

檜山の風は音なく吹いて来る

漢方と新薬どちらも売れてます

終着駅喜劇も悲劇も降りて来る

瓢箪に遠い昔を問うてみる

アラジンのランプに秋がふかくなる

笠智衆と散歩がしたい秋の道

磨崖仏だけが紅葉の心知る

握るほどチャツカリ売れる握り飯

痛いほど握れば情けが薄くなり

御先祖の流れの果てのキリギリス

平和ですヤスシキヨシのコンビです

森繁と寛美それぞれ芸の味

ヒメクリの今日をめぐって掌をあわせ

城下町尉と姥とが睦みあい

蛇のよう核は地球を這うばかり

煩悩のピエロに着せたい柄を選ぶ

ニューメデア銀行さんが忙しい

指定席ドンキホーテの顔並ぶ

水客、紫香、潮花、萬的先生の柳歴五十年を讀えて
めでたさも近江八幡吟行記

禿鷹のようにマイクを突きつける

汚職には遠い瞳の腕カバー

仁丹の大礼服も懐しや

「あじやり餅」京には京の京訛り

シャンソンも落ち葉も痩せて冬に入る

また一人欠けて師走の御挨拶

寄せ書きのみな美しく柔らかく

公園の隅の隅なる木偶の坊

生きのびて夫婦茶碗の冬の顔

来年の暦見ているアマノジャク

シクラメンしばらく冬をあたたためる

凡人の宿命手の鳴る方へ行く

打ち身には効くと泥鰌の骨を抜き

マンションのブザーを押せば低気圧

ゼッケンは日日好日のVサイン

表具屋が出張旧家の瞳が笑い

人間の欲が浄土をブラックに

甘酒の心の底に滲みるもの

サミットの財布の中身探りあい

ドンピシャリ修身治国平天下

数珠もんで悟りの浄土まだ知らず

古傷は忘れた顔のウドンスキ

神々の怒りか冬の三原山

寒卵わが春秋に悔いなきや

政治みな叩きバナナに見えてくる

発言のシャツのボタンはずれたまま

裁かれる絆はがんじがらめなり

スカタンの中にユーモア滲み出る

マッサージの定年揉まれながら知る

中山克巳先生へ
この人にこの著冬の天光る

大正の惚けでもいいさ間にあえば

通夜の席帰らぬ人の裏話

水引の慶び水引作る人

貸しそうで貸してくれない炬燵です

ある時の自我像鬼とも仏とも

中国の孤児に二月の富士が見え

山男白山まるごと冷蔵庫

堅物の堅物どんと寄付をする

堺先生の長寿を祝う

百歳の春秋松風に吸われたり

川口弘生先生を悼む
雲白く流れて二月の人を恋う

ドラマ終る津軽のいのちの風の彩

国鉄終焉
雪しきりローカル線は幻に

釈然とせぬが理解はしています

男対女に春風すき間風

秒針の時の流れの柵に

大阪のキタもミナミも隙がなし

子午線の上をマラソンする男

大阪市立美術館
み仏も汗かきそうな霊場展

天理高校バレード
ブラスバンド 日本一の風を切り

鉛筆の音がかすかな懺悔録

ひのきしん 則天去私の匂いする

お賽銭もベースアップのほしい顔

さてどれにしようか銀行の俳画展

シグナルの中にいのちの車椅子

鼻の下の長い男の八卦見よ

列島の砂漠グルメで救えるか

奈良東大寺

サミットに晋山式の香を焚く

比叡山開創二百年

最澄は風と雲とに乗りたまい

衣笠選手国民栄誉章受賞

赤ヘルの闘志よく打ちよく走り

ふり向かぬ心よ二十一世紀

印鑑が違ふ土曜の影法師

魚の名を嫌というほど箸袋

和敬静寂そんな心も遠くなり

祝電も弔電も浮世のカクテルに

残飯の油いためもおつなもの

東京松寿園火災
ニッポンの悲劇よ寝たきりの火の海よ

これはこれは江戸の小咄古川柳

グルメ天国カルチャー天国多忙なり

日日好日天声人語と素粒子と

平和です柴漬茶漬相聞歌

落合もバースも同じ春の宵

瀬古はよしボストンマラソン爽やかに

自画像をそつと見ている寒椿

帆船は白風はみどりなり

波切大王入港

アリガタバチ輸入畳へ住みついて

春夏しゅんか秋しゅう冬とう月亭花朝の夏帽子

花束高橋操子先生の句集「万年青」の発刊を祝うを受ける母さんの肝っ玉

盃の底で七転八起する

ファミコンへ餓鬼大将を連れて来る

ある時の孫他人めき他人めき

太郎冠者その夜寝つきのわるいこと

風診の孫がナヨナヨ寝ています

明^あ希^きちゃんの笑い幸せ連れてくる

孫が来て一匹狼崩れたり

安物の靴に闘志がはちきれる

川口弘生先生追悼句会
浄土から呼名の声が聞こえそう

伝説の川へゆっくり箸が浮き

老い二人トイレ待つ人待てぬ人

だしぬけに九官鳥の「アイラブユー」

ふるさとを知らぬダービーの瞳が寂し

揉み手して値上げもしますJ R

戦争はもう懲りましたやっこ尻
土井耕花先生に贈る

商魂へ戦陣訓の知恵も借り

浄土への周遊券があつたなら

直原玉青先生の個展を見る
たじろぎて「鳴門渦潮」に風光る

近藤和夫氏に贈る
その勲浪速に橋のある限り

經濟大国裏を覗けば兎小屋

美辞麗句並べ説伏風の中

人間の正体見たり裏口に

国を売るスパイよ今日は何を食べ

同心円の中の神様と人間と

鈴虫のリンリンリンと遠い過去

夏休み「こども大使」は何処へ行く

テンプラで吞んで外堀埋められる

古切手ちいさい祈りの幾山河

なぜか今ビートルズビートルズ

わが書架にサラダ記念日みだれ髪

別れ道輪廻の風を聞くばかり

大学の受験さてさてややこしい

よく遊びよく遊び「前略金送れ」

ほんとうの幸せ一日一ページ

来年の漢字博士に夢を賭け

ニッポンの観音様が眠られず

もう聞けぬ古い男の台詞です

鶴田浩二逝く

石原裕次郎逝く

タフガイの歌い続けて五百曲

割り切ると当世風な顔になる

NTT浄土へ持って行けますか

大窪英憲氏逝く

疾風のごとく浄土に召されたり

淡々と生きてアルバム堆し

平凡はよし牛どん食べながら

世話のやける男で眞実滲み通り

追悼川柳大会（高野山）
お二階の風鈴浄土の音がする

何内天笑御夫妻へ
仲のよい夫婦仲よく脇取に

キツチリと利子は雀の涙ほど

ニッポンはよい国言霊咲きみだれ

幻の舟にわたしの昨日今日

本物と偽物どちらも売れている

答弁は煉り齒磨をしぼるよう

柿下盛寿君を悼む

雲の峰浄土の君を見ておわし

アメリカは勝手な勝手なお友達

素晴らしいピカソの前に跪く

十年の時の流れよロッキード

守口市長木崎正隆先生逝去
飄々と瞳の奥の闘志かな

今日生きて今日のいのちの万華鏡

風船を飛ばそう霊園の空高く

ハッピー着て行く人間の坂がよし

日本が世界が揺れる木の葉船

我も人も旅路の果ての顔の皺

わがいのち無心に回るみずぐるま

跋

羽原静歩さんが先の句集「足跡」(昭和五十七年十二月刊)に続いて、ご自分が経営しておられるかおり幼稚園の二十周年を記念して、第二集「いのち」を上梓されるというお話を承わり、誠に欣快に堪えない一人である。

愛媛の松山が故郷である静歩さんはまさに教育の盛んな土地柄の影響からか、教育一筋の道に勤しまれたかたわら、四十歳頃に俳句を学ばれ、その後昭和三十七年に川柳を知るようになられてから「この道ひとすじを光明として」(「足跡」のあとがきにそえて)歩んで来られただけに、本当に真面目な生一本なひととなりを彷彿とさせる作品が多く見受けられる。

出来ぬ子の瞳が何か言いたそう (足跡から)

教壇に立たれた静歩さんの胸をひしひしと打ったであろう“子の瞳”を、卒直に受けとめられた教育者としての“眼”がそこにあったことでも首肯されることと思う。

人間陶冶の詩といわれる川柳は人間そのものを、その心を歌うべきものと私は信じておりますが、そのことはとりも直さず人間形成にも大きな影響があるものと思う。そのような観点からみると、この「いのち」の中に集約された作品は、静歩さん自身をみごとに表現された作品で、読む人をして感動を呼ぶことだろう。

生かされて真実一路の旅をする

根っからの教育者であった静歩さんが、この一句に象徴されているような気がする。神様の心か御仏の慈悲か、それは我々凡人には計り得べくもないが、神仏に頂いた「生」に向って老いてなおひたすら、真実の人生を旅する静歩さんの真摯な姿がここに見受けられる。

また静歩さんはこの「いのち」の中で「いのち」の原点として、ふるさとの子規を、そして漱石を賛え、よき師、よき友、素晴らしき仲間を大切にすることによって、自らの人生をより豊かにし「いのち」の有難さを噛みしめておられるようである。

老いて益々盛んとはまさしく静歩さんの現況を表現するにふさわしい言葉

だが、

曼鑠と張りきりほんのり呆けている

とご本人は謙遜しておられるが、なんのなんの心の方こそ、正に曼鑠たるものがある。

願わくば、喜寿を間もなく迎えられる静歩さんが将来更に大いなる飛躍をせられるよう心から祈念して筆を擱く。

いのちある限り歌わん静歩集

曼鑠としてわが道をゆく静歩さん

昭和六十二年十一月吉日

城北川柳会主宰

吐田公一

あとがき

早いもので、小生が拙著「足跡」を刊行してから五年の歳月が夢のように過ぎ去ってしまった。「足跡」の序文の中で薫風先生は、「川柳は心である。」とお教えを受けて以来、私は私なりに先ず日常生活における心の軌蹟を真面目に反省することが何より大切であると思った。別な表現をすれば、「ポンコツはポンコツなりに平凡に徹する。」ということである。

私は最近、年に一回乃至二回、ふるさとの松山に帰っている。目的は二つある。一つは、「松山市立子規記念博物館」の見学、今一つは「昭八会」（愛媛大学教育学部、昭和八年の卒業生の集い）の会合に出席するためである。その度に感じるのは、子規と漱石の美しい人間像の輝きであり、特に子規の俳句及び短歌に対する激しい執念である。所謂、子規の「月並な表現を排除する精神」を川柳の世界に少しでもとり入れたいと念願している。

この意味で、先の「足跡」は叙情的な表現の句が多かったが、今回の「い

のち」では、批判的な洞察の句をより多く登場させたつもりである。前回同様、この本をこれまででお世話になった諸先生並びに、川柳界の先達にご覧頂けることは私にとって望外の喜びである。

今回拙著出版にあたり、特に川柳塔社の主幹西尾栞先生には題簽のご揮毫並びに序文を賜わり、同社副主幹並びに編集長の橘高薫風先生には、文字通りご多忙中にもかかわらず一字一句細部にいたるまで御指導を賜わり、又序文まで頂き光栄の至りである。

又、小生と同窓の元愛媛大学教育学部教授石井南放兄には、ふるさと「松山」の诗情溢れる水墨絵の揮毫をお願いし、小生の句集「いのち」に格別の光彩を添えていただき、こんな嬉しいことはない。

尚、跋文には、今は亡き情熱の川柳家、故川口弘生先生の後を継承する「城北川柳会」主宰の吐田公一氏のお世話になり、あたたかいそのご厚意に対し、心からお礼を申しあげる次第である。

尚今回かおり幼稚園二十周年に当り、来賓の各位に、拙著を通して「川柳」のよさを、すこしでもご理解いただけるならば、之に越した喜びはない。

ともかくも、これからは廣大無辺な神仏のご恩により「只今生かされている」という信念を常に堅持し、一層心身の健康に留意し、ゆつくりと大地に根を下して、より人間味の溢れた川柳を作りたいと念願している。

昭和六十二年十一月二十九日

学校法人美育学園かおり幼稚園

創立二十周年記念の佳き日

宇治醍醐プラザにて

理事長 羽 原 正 典

あとがきにそえて

川の流れに流されていく花片を追って、川下へ向って行く童女のように、一つのことを藪地に追いついて行くその時、古木の柵かきに止った薄紅色の花片がくるくると舞いながら、柵しがらみとなった風情はとても静かな喜びを感じます。それが私の今の心境です。

いのち、あればこそ、いのちありてこそ、どちらが今の気持ちに、びつたりするかしらと考える、その時、本人が五年前に、「足跡」の出版を、生涯の締め括りにと考えていた、あの思い出、その時は幾度か眠れない夜もあって、よくまあこんな睡眠もとらないで健康が保てるものだなあと思ったものでした。

ともかくも、お陰さまで目的を達成し、出版の喜びを味わうことが出来ました。このことは、出版記念句会を開いて頂いた川柳塔社のこの道を愛する先生方のご真情の賜だと感謝いたしました。それは昭和五十八年一月七日の

ことでした。

出版後何年間か、虚脱の状態で、病氣勝ちになりまして、神経痛、糖尿病と、病魔に襲われて果ては、入院すれすれの心配をしなければならぬばかりか、いのちさえも氣遣うような本人の発言があつて、とても心細く思いました。

でも、不思議な生き運のある人で、昭和六十一年十一月のある日から、燃え尽きかけた、ローソクに継ぎ足しが出来て、恍々として光り、燃えに燃えて、又々その道を「川柳」への執念と、自己の名を今世に残していこうという、絶対的な執念と迫力が、今日の句集「いのち」の出版をしようと思ひ立つたのでございましょう。私には、とてもうれしいことです。本人にとっては一つの悟りの心境でしょう。

折もよく、かおり幼稚園創立二十周年という意義ある時だけに、ひとしお喜ばしいことだと思ひます。今日の経過を考える時、今更のように人の世の情けの素晴らしさに、感動せざるを得ない心境になりました。

毎日の生活の中に、人の温もりを感じる時ほど、靈妙なまでに、その出会

いと機微と、忘れ得ぬ心の流れに打たれることはありません。

今正に、真実一路の旅の喜びの中に、いのちの素晴らしさと、尊さを泌々と感じずにはられません。

いのちの尊さを、いのちある限り、生きて、生きて、生き抜いて、喜びのドラマを拵げ、書き誌していこうという心境になっています。いのちありてこそ。

青柳の糸よりかけてみどりなす峠の蔭に憩う家あり

昭和六十二年五月五日

羽原香苗

著者略歴

- 大正1. 12 愛媛県今治市波止浜に生れる
昭和8. 3 愛媛県師範学校本科第1部卒業
(現在の愛媛大学教育学部)
昭和8. 3 愛媛県公立小学校訓導
昭和11. 4 大阪府公立小学校訓導
昭和19. 6 中部第23部隊入隊
昭和21. 5 復員(博多)
昭和24. 3 大阪府守口市立第3中学校教諭
昭和30. 4 山下翠庸先生に俳句を学ぶ
昭和37. 3 大阪府守口市立第1中学校教諭
昭和40. 2 川柳雑誌会員
昭和41. 3 大阪府守口市立第1中学校退職
昭和42. 3 かおり幼稚園理事長
昭和57. 10 川柳塔社理事
昭和57. 12 句集「足跡」発行
昭和62. 11 句集「いのち」発行

随想と川柳 い乃智

昭和62年11月29日 発行

定価 2000円

著者 羽原 静歩(正典)

〒570 守口市外島町2-11

コスモハイツ守口308

T E L (06)991-2270

発行所 川柳塔社

大阪市阿倍野区三明町2-10-16

ウエムラ第2ビル202号

T E L (06)629-6914

印刷・製本 株式会社アリネグラフィカ

